

## かわくぼ 川久保遺跡調査の概要 縄文中期・後期の集落跡

(南魚沼郡湯沢町神立字川久保)

今回の発掘調査は国道17号(湯沢インター付近)の拡幅工事に伴うもので、昨年度から引き続いて調査を行いました。調査面積は2,000㎡と狭いのですが、石器や土器などの遺物は、浅箱にして370箱余りにもなりました。炉跡も前々号(32号)で紹介した敷石を伴った複式炉や円形の炉跡(写真右)、石囲炉など合わせて17基を検出しました。これらは竪穴住居や掘立柱建物などの住居跡に伴うものと考えられます。

包含層は厚いところで80cmにもなりますが、全体に遺物が多く包含されており、調査中は一面に土器が出土し、足の踏み場もない程でした。このことから、川久保の地では、縄文中期から後期の約1,500年間にわたり、縄文の人々が連綿と住み続けていたことが分かりました。

土器は、完形品や復元可能なものが多数ありました。写真はそのうち縄文中期中葉の土器を復元したもので、躍動感溢れる造形が特徴です。前列は粘土紐で造形した土器で、右は火焰型土器、中央は王冠型土器と言います。左は信濃川流域によく見られる土器で、綾杉文と剣先文が特徴です。(鈴木秀人)



円形の炉跡



川久保遺跡の縄文時代中期の土器